
春休みだよっ！BSAA学園！モンスターハントで大騒動！？

龍の骨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

春休みだよっ！BSAA学園！モンスターハントで大騒動！？

【Nコード】

N2506BA

【作者名】

龍の骨

【あらすじ】

『BSAA学園！』と『BSAA学園！外伝 Healing lost hospital 加富根総合病院物語』とコラボ！！街に脱走した『モンハンシリーズ』のモンスター達が脱走し、無傷でハントをすることに！？

総合病院でトラブル発生！？マジで！？

その日、坂本やミーナ達に代わって、第501統合航空戦闘団基地の復興作業の確認の任務に出向いた芳佳とサーニヤがそのまま加富根総合病院に向かって飛行していた時、その『異変』に気付いた。いつもなら真下に広がる大都会から聞こえてくるはずの喧騒の代わりに、聞こえるのは無数の悲鳴と、爆音や崩壊音、そして普通の獣のものではない何か恐ろしいげな咆哮であった。

サーニヤ

「芳佳ちゃん！」

芳佳

「うん！行ってみよう！」

2人はそれぞれストライカーユニットを全速力で展開させて、高度を一気に下げて騒ぎの聞こえる方に向かった。

すると、2人の前に見えてきたのは無残に壊されたビルや車などが滅茶苦茶に散乱した道路。

不安に眉を寄せる2人の視界にさらに衝撃的な光景が入ってくる。

ランポス

「……ギヤアア！ギヤアア！」

ドスランポス

「ギョアアアアアア！ギョアアアアアア！」

青い鱗に黒い縞模様の身体を持ったラプトルのような姿のモンスター
ーランポスの群れが人気のなくなった道路を走っていた。

その先頭には一際大きい身体に赤い鶏冠が特徴のランポス達のリーダー ドスランポスがいた。

芳佳

「あれって…『モンスターハンター』のモンスターだよね!？」

サーニヤ

「どうして!？」

状況が理解できず、目を瞬いている芳佳とサーニヤの前に、ランポス達が去ったのを見計らったかのように今度は鹿のような姿をしたモンスター ケルビの群れが横切った。いや、ケルビだけではない。

よく見ると、道路の端にあるスーパーの前には、道路に散乱した野菜や果物を食べる草食系モンスター アプトノスや、宝石店や銀行など金目のある店から次々に現金や金製品を運び出す黒い猫の姿をした獣人 メラルーなど、まるでゲーム『モンスターハンター』の世界からそのまま飛び出したかのように生身のモンスター達が街中を縦横無尽に駆け回っていた。

芳佳

「一体どうなってるの?!」

サーニヤ

「!?!? 芳佳ちゃん!あれ!」

ますます理解できずに苦しむ芳佳にサーニヤが指を指し示す。芳佳がその方向を向くと…

~~~~~

遠くに見える加富根総合病院の屋上からなにか電波のようなものが発せられているのが確認できる。  
それはあつという間に街に広がっていき、ついには街全体を覆う半球状の形に成長した。

芳佳

「あれって魔法シールド？」

サーニヤ

「でもちよつと違うかも？」

自分達が使っているものとは構造は違えど、おそらくシールドかバリアの類であると察した芳佳とサーニヤ。

サーニヤ

「モンスターハンターのモンスター達にシールド…明らかにただ事じゃないよね？」

芳佳

「うん。とにかく病院に行ってみよう」

2人は再びストライカーユニットのジェットを噴射させ、病院へと向かった。

病院に到着するまでの間にも、ヤドカリのようなモンスター ヤオザミやエリマキトカゲのような姿をしたモンスター ジャギイといったモンスター達を見かけたことで、芳佳とサーニヤの不安はますます

ます大きくなった。

病院に着くと、警備隊が慌ただしく周囲を警戒するように施設内を駆け回っていた。

それだけでなく、彼らはそれぞれ短機関銃MP5やイサカM37シヨットガン、さらにはRPG-7といった銃火器を持ち、体には防弾チョッキやプロテクターを纏うなど完全武装を施していた。

やはりただ事ではないと察した芳佳とサーニヤは、混乱を避けるために429号室の窓から直接入る事にした。

芳佳

「クリス君！」

病室に飛び込むと、そこにはクリスをはじめ、政胸、ラルクといったいつものメンバーに、優希邑、レベツカ、鶴姫、魔理沙、貂蝉、華陀といった病院のスタッフ達も総出で揃っていた。

そして彼らと共に見慣れない人間が3人。

金髪縦ロールのいかにもお嬢様っぽい女性と、緑色のウルフヘアの女性、青色のボブカットの女性が一緒に立っていた。中でもお嬢様っぽい女性はひどく憤慨している様子。

芳佳

「クリス君！街中にモンスターが…」

クリス

「ああ、わかってる」

クリスが芳佳の言葉を遮ると、横から政胸が話し始める。

政胸

「街中にモンハンのモンスターが暴れまわってるんでしょ？それで今、このロールキャベツからクレーム受けてたのよ私達」

金髪の女性

「クレームではありませんわ！これは命令です！大至急加富根総合病院のスタッフ、患者総出でこの事態の收拾を図りなさいという！」

政胸の向かいで2人の女性を脇に立たせた金髪の女性が苛ついた声を上げた。

サーニヤ

「あの。そちらの方は？」

優希邑

「ああ、こちらの方は中国の大企業『YUKUMO社』の若社長袁紹さんです」

サーニヤ

「YUKUMO社ってあのアジア有数の巨大企業の？」

説明しよう。

『YUKUMO社』とは、主に『バイオテクノロジー研究部門』、『土地開発部門』の2つの事業を中心とした中国を拠点としている世界的企業で、金山企業や優希邑の実家であるT・ファウンダーシヨンに続く資産や発言力を持つ、まあバカでもわかるように言えば『大企業中の大企業』なのである。

ラルク

「なるほど！今の説明でよくわかった！」



クリス

「ラルク…それは自分がバカだという事を認めてるようなものだぞ……」

一人納得したように頷いてるバカ一名…

袁紹

「そうですね！私がアジア…否、世界一の大企業『YUKUMO』の社長 袁紹ですわよ！オーホッホッホッホ！」

そしてここにバカがもう一名…

魔理沙

「確かに頭と性格の悪さは世界一だと思っぜ…」

袁紹

「そこ！聞こえてますわよ!!」

魔理沙のつぶやくような皮肉に電光石火でツッコむ袁紹。

芳佳

「で…でもそんな人が一体どうしてここに…っていつかそもそも何があっただっていいんですか？」

政胸

「まあ、簡単に説明するとね…」

政胸ビジョン開始

政胸

「はあ！……はあ！……今日も引き分けね…優希邑」

優希邑

「はあ！……はあ！……次こそは勝つてみせますよ」

今朝、政胸と優希邑はいつものように地下の巨大倉庫の中で決闘を繰り広げていた。

その時、いつもなら空っぽのはずの倉庫に何故か大小様々な大きさのコンテナや木箱が詰め込まれていた。

そんな事など気にも留めずに決闘を繰り広げていた2人だが結局今日も決着がつかず、やがて回診時間が迫ってきた為、互いに刀と槍を収めた。

その時だった。

???

「……………助けてくれニヤ……………」

政胸・優希邑

「「!?!?」」

2人の近くにある木箱から何やら声が聞こえた。

優希邑

「政胸さん？」

政胸

「ええ、聞こえたわ」



黄色い叫びを上げた。

メラルー

「んにゃ！？おい人間！このロープを解いてくれニャ！助けてほしいのニャ！」

政胸

「もちろんよ！今助けてやるわ！」

そう言つて政胸は疑う事無くメラルーのロープを刀で切った。

これが災難の始まりであった。

その後、政胸と優希邑によつて逃がされたメラルーは器用な手つきで他のコンテナを片っ端から開けていき、その中身は運が悪いことにモンスター達の詰め込まれたコンテナであった。

そして、最終的にメラルーは倉庫の搬入口のドアまでも開けてしまい、そこから無数のモンスター達が一斉に病院の外へ出てしまったというのだった。

政胸ビジョン終了

ラルク

「んで、その結果がこれつてわけ」

ラルクが軽い口調で説明をめるが、芳佳とサーニャはまだ状況を理解できなかった。

つというのも…

芳佳

「そもそも、なんでモンスターハンターのメラルーがこの病院の倉庫に、しかも木箱なんかに閉じ込めていたんですか!？」

サーニヤ

「否、メラルーだけじゃありません。アプトノスやケルビ、それにヤオザミやランポス、ジャギイまで見ましたけど」

芳佳

「なんでそんなにも多くのモンスター達がこの病院にいたんですか？」

レベツカ

「それはですね。この袁紹社長が今度、お台場に建造しようとして計画している『モンハンシックパーク』の為だそうですよ」

芳佳・サーニヤ

「『モンハンシックパーク?!』」

レベツカビジョン開始

『モンハンシックパーク』とはYUKUMO社が計画中のその名の通り、バイオテクノロジーによってクローン生命体として実際に製造した『モンスターハンター』のモンスター達を飼育し、モンハンの世界をありのままの姿に現実に再現しようとする体感型レジャー施設であるらしい。

そこではアプトノスやポポ、ケルビ、リノプロスなどの草食系モンスターからランポス、イヤンクック、クルペッコなどのメジャーなモンスター、そしてリオレウス、リオレイア、ババコング、クシャ

ルダオラ、ラングロトラ、ジンオウガといった多くのハンター（ユ―ザー）達を苦しめてきたモンスターまで、ほとんどのモンスターがゲーム中と同じ生体系の元で飼育される予定であったそうだ。

そこでYUKUMO社は建造したテーマパークに放牧する前に一度モンスター達の健康診断を行うべく、モンスターを製造した中国から廠戒態勢の下でこの加富根総合病院に連れてきたらしく、社長であり、プロジェクトの責任者でもある袁紹も様子を見るために来日していたのだという。

レベツカビジョン終了

文醜

「ちなみに我が社の自信作は何と云ってもリオレウス、リオレイアだよ。まあ、どっちも逃げ出しちゃったけどね」

そう言つて得意げに話す緑色のウルフヘアの女性：袁紹の秘書の一人 文醜。

芳佳

「リオレウスにリオレイア!？」

芳佳は声を張り上げる。

まさか、さっき聞こえた咆哮は奴らのものなのか？

芳佳

「まずいじゃないですか!？ランポスなら近づかなかつたら大丈夫ですけど、リオレウス、リオレイアなんて下手したらバーベキューにされますよ!！」

政胸

「そうよねえ。モンハンのこんがり肉はおいしそうだけど自分達が『上手に焼けました』なんて事になったら洒落にならないわよねえ」

芳佳

「うまい事言わないでください政胸さん！大体今回の騒動の原因は貴方なんですよ！？」

全然悪びれた様子を見せない政胸に憤慨する芳佳に袁紹も「そうですわ！」と便乗する。

袁紹

「貴方達のせいで我が社の人類史上最高の商品が、最大の災厄になつてしまいましたわ！張本人なのですからもっと反省をなさい！」

政胸

「いや、無理よ。あんなかわいい猫見ちゃったら助けたくないわけないでしょ？」

クリス

「そもそも、なんでメラルーなんか飼育しようとしたんだ？普通はちゃんと常識の通じるアイルーを飼育するもんだろ？」

クリスの冷やかな指摘を受けて、思わず怯む袁紹。

袁紹

「そ…それは…わ…私はメラルーが好きだからですわ！これは私の趣向ですわ！」

魔理沙

「本当に？」

袁紹

「そうですね！なんですその目は！？」

魔理沙の疑うような視線を受け、ムキになる袁紹。

文醜

「そうだ！麗羽様が本当は何度もアイルーを製造しようとしてもメ  
ルーしか造れないから、最終的にやけくそでオーブン前にペンキ  
で塗ってアイルーに仕立て上げて展示するつもりだったなんて死ん  
でも言えるかー！」

顔良

「文ちゃん！全部話しちゃってるよ！」

袁紹をフォローするつもりが逆に事の真相を話してしまった文醜に  
横から青いボブカットの女性 袁紹のもう一人の秘書 顔良がツツ  
コみを入れる。

華佗

「まあ…状況はともかく…当病院のスタッフが原因を作ったことに  
違いはない。それに街へ逃げたとすれば悠長な事は言ってられない  
ぞ。貂蝉婦長や卑弥呼院長も『大至急警備隊総出と可能な限りのス  
タッフや患者を動員して事態の收拾に当たれ』との事だ」

鶴姫

「でも華佗先生。もしかしたらもう既にモンスター達はこの街から  
外に出たかもしれませんよ？」



不安げに話す鶴姫に顔良が説き伏せるように答えた。

顔良

「その点は安心してください。こんな時の為に持ってきていた我が社の最新型防衛システム。モンスター脱走防止用シールド発生装置『MAKI（モンスターここで行き止まりですわ）命名者 袁紹』をさつき機動しましたから、モンスター達がこの街から外に出る事はない筈です」

サーニヤ

「でもそれって裏を返せば私達もモンスター達と一緒に閉じ込められたってことじゃ…」

顔良

「大丈夫です。我が社で生産したモンスターには皆それぞれ特殊な制御チップが埋め込まれていて、シールドはその制御チップにしか反応しない仕組みになっています。だからモンスター以外は普通にシールドを通りぬける事ができますよ」

華陀

「だから、すでに街の民間人にはシールド外へ避難勧告がなされているそうだ」

それを聞いたサーニヤはほっと胸をなでおろした。

ラルク

「まあ、それだったら、俺達で遠慮なくやらせてもらおうか。モンスターハント」

袁紹

「ちよつと！くれぐれも無傷で捕獲してくださいね！！これから展示予定のモンスターなのですから！」

ラルクの黒い笑みに袁紹が慌てて釘を打つ。

するとクリスはまだ納得できないのか、抗議を入れる。

クリス

「でも『やる』って言ったってここは病院だろ？さすがにまずいんじゃないか？ 危険なモンスター狩りに入院患者まで動員するってというのは」

クリスの意見は尤もだ。

政胸

「しょうがないでしょクリス。これは連帯責任なんだから、よほどの重病患者以外ならいい運動だと思って割り切ったら済む話だしね」

クリス

「いや、だからって…」

その時、病室のドアが開き、435号室の入院患者 ダンテが入ってくる。

ダンテ

「いいじゃねえか。面白そうだしやっちまおうぜ」

ダンテはやる気十分なのかエボニー&アイボリーを取り出してガンスピンをしながら意気揚々としている。

ダンテ

「ベッドで狸寝入りしてるより、モンスター追っかける方がよっぽど楽しそうじゃねえか」

クリス

「いや…でも…」

すると、ダンテの後ろから点滴を打ち、松葉杖を突きながらリュウが入ってきた。

リュウ

「…彼の言うとおりだ…俺も参加しよう。ストリートファイター以外の強者と戦えるいい機会だからな…」

クリス

「いや、アンタその前に自分の身体を労る機会作れよ！ どうしちまったんだよ！その姿!？」

リュウ

「以前の貂蟬婦長のマウスツーマウスの後遺症がまだ残ってる…でもその気でやってみるさ…」

クリス

「どうみても無理だろうが！ ってか病室戻って寝てる!」

そう叫び、重症リュウを帰すクリス。

すると、なんだかんだで狩りに出向く空気に染まりつつある病室内。そこで芳佳の慌て気味の抗議が飛ぶ。

芳佳

「ちょっと待ってくださいよ！ほんとうに、皆さんでモンスターを捕まえる気ですか?!」

ラルク

「大丈夫だつて！こつちには傭兵にICPO捜査官、美人剣士に美人槍使い、美人弓使いに、魔女もいるんだから敵なしだと思つぜ！」

芳佳

「いや！そういう問題じゃなくて…つてあれ!?ちょっと待ってください!?!」

芳佳はさっきのラルクの言葉を思い返してみた。

傭兵（ラルク、ダンテ）、ICPO捜査官、美人剣士（政胸）、美人槍使い（優希邑）、美人弓使い（鶴姫）、魔女…魔女!?!

芳佳

「私達も既に討伐メンバー入り決定ですかああ!?!」

勝手にメンバーに入っていた事に驚く芳佳。

政胸

「あたりまえでしょうが。大体、人外の敵と戦うのがウィッチの専門分野なんですよ?」

芳佳

「そうですけど私達が戦うのはあくまでネウロイであつて、モンスターじゃありません!?!」

政胸

「いいでしょネウロイでもモンスターでも、どっちも化けものには

違うんだから。それにほら、呼び方だってちょっと似てるし…」

芳佳

「似てませんよ！一文字もあってないじゃないですか！！」

傍若無人な政胸に激しくツッコむ芳佳。

するところさそうに政胸は言う。

政胸

「あのねえ、アンタ達の仕事は人々を守るために戦う事でしょ？人を守るのが魔女の仕事ならその職務を全うしなさいよ。街の平和がかかっているのよ？」

芳佳

「で…でも考えてみてくださいよ！リオレウスやリオレイアがいるんですよ！戦い慣れてる私達でも恐怖心を抱くっていうのに、それを民間人だけで立ち向かうなんていくら皆さんが腕に自信があるといっても自殺行為じゃないですか！」

そこへ文醜がポツリと補足する。

文醜

「あ、ちなみにティガレックスにジンオウガも逃げてるから注意した方がいいよ」

芳佳

「ティガレックス！？それにジンオウガ！？」

新たな危険モンスターの情報に卒倒しかける芳佳。

芳佳

「だったらなおさら危険ですよ！こんなのもう私達正規の軍人でなければ、確実に死者が出ますって！否、私達でも死者がでるかも！」

美緒

「馬鹿者！そんな事で弱気になつてどうする！？」

芳佳がそう叫んだ時、病室のドアが開き、美緒を先頭に、芳佳、サニー以外のストライクウィッチーズの面々が入ってきた

ミーナ

「宮藤さん。私達ウィッチーズは既に戦う覚悟はできてるわよ」

そう自信満々に話すミーナの姿は…何故か麒麟娘の装備であった。

クリス・芳佳・サーニヤ

「っ「いやいや！おかしい！」「」

クリス、芳佳、サーニヤはミーナの姿を二度見した後、大きくのけぞった。

芳佳

「ミーナ中佐！なんで麒麟装備なんですか！？」

ミーナ

「えっ？だってモンスターハントをするんでしょ？だったら気分からモンハンの世界に入ろうかなって思つて…」

クリス

「完全に遊ぶ気満々かよ！？ってかどうやってその装備入手したん

だよ!？」

クリスがそう言ってよく見てみるとミーナだけでなく、バルクホルンはボロス装備、エーリカはジャギイ装備、そしてリネットはクック装備、ペリー又はアグナ装備、ルッキーニはペッコ装備、エイラはブランゴ装備と、見事にモンハンの装備をそれぞれ着こなしていた。

その中でシャーリーだけは何故かスイー プ キュアのキュア ロディのコスプレ姿であった。

クリス

「っていうかなんでシャーリーだけキュア ロディのコスプレなんだよ!？もはやそれモンハン関係ないだろ!！」

シャーリー

「ああこれ?ラルクが仕立ててくれたんだけど?」

クリス

「ラルクウウウウ!!!」

クリスはすぐさまラルクに対し強烈なとび蹴りをしてツッコんだ。

クリス

「中の人繋がりがああ!？」

すると、ミーナの後ろから美緒がため息を吐きながら歩み出てきた。

美緒

「まったくミーナもお前達ももっと真面目にやれ!モンスター達の犠牲者が何時出るかわからないこの危機的な状況の中で遊んでいる

場合か!？」

そうピシヤリと言い放つ美緒の格好は…『戦国BASARA』の伊達政宗のコスプレ姿であった。

芳佳

「いや、坂本さんもおおおおおお!!」

サーニヤ

「少佐!ふざけるのも大概にしてください!」

政胸

「そのコスプレやめてくれない!?!私とキャラが被るじゃないの!」

クリス

「いやツッコむ所そこじゃねえだろ!!」

4人のそれぞれのツッコみが病室内に響き渡った。

ラルク

「痛てて…まあ、とにかくこれで仲間が揃った事だし、早速討伐に行くか」

クリスに蹴られた後頭部を押さえながらラルクがそう切り出すと、まだ抵抗があるのか芳佳が抗議する。

芳佳

「でもやっぱりこれだけの人数では人手が足りないんじゃないんで



すか？」

ダンテ

「心配ねえだろ。必要なら人手を収集すりゃいい話だし」

なんでもなさそうに話すダンテにリーネが問いかける。

リーネ

「でもどうやって収集するんですか？モンスター狩りなんて危なすぎて普通の人なら絶対誰も進んで参加しようとはしませんよ？」

エーリカ

「そうだよねえ。私達もあくまで任務だから参加してるけどこれが命令じゃなかったら絶対参加してないよ」

ルッキーニ

「せめてご褒美とかあったらいいんだけどねえ」

ルッキーニのその言葉を聞いた時、ラルクが何かを閃いたかのよう  
にハツとなる。

ラルク

「それだ！褒美だよ！ゲームのモンハンのクエストみたいに賞金な  
り賞品なり付けてやってそれで参加者を集うんだ！」

政胸

「あ！それいい考えじゃない！こっちもやる気起きるしね」

袁紹

「ちょ…ちょっと！何を勝手な事を言ってるのです！？大体賞金

は誰が出すというんですか?!」

袁紹の言葉に部屋にいた全員が彼女に向かって指を指す。

袁紹

「ちよつと！何で私が!？」

政胸

「いいじゃないの。こつちだって命がけでアンタんとこのモンスター捕まえようとしてんだからそれくらいはtakeはあつていいんじゃないの?」

袁紹

「し…しかし」

ラルク

「頼むよ袁紹さんよお。こつちだってその分しっかり働いてやら。な?」

ラルクの頼みに渋々首を縦に振る袁紹。

袁紹

「わ…わかりましたわ…では一番功績を上げた方には賞金10000万円と、希望者には『モンハンシックパーク』のペアチケットを差し上げるって事でどうですか?」

政胸

「excellent!上等だわ」

ラルク

「OK!じゃあモンスター狩りだあ!」

一気にボルテージを高める一同。  
しかし、一人だけまだ不安気な表情なのが一人。

芳佳

「でもいくら賞金があるからって、自分からモンスター狩りに参加する人っていますか?」

ラルク

「それは心配ないだろ。“あの学校”の連中なら賞金や賞品があると聞けばすぐにでも食いついてくるはずだ」

芳佳

「あの学校?」

芳佳は首を傾げていたが、何かを思い出すと「まさか…」とつろたえる。

ラルク

「そう、『BSAA学園』に決まってるだろ。あそこの生徒や教師達ならこんな面白い話に食いつかないわけがないさ。普通の感性じゃない連中ばかりだし」

サーニヤ

「でもラルクさん。はっきり言って零斗さん達がモンスター狩りに参加したらいろいろ大変な事になるんじゃない?」

サーニヤの忠告を他所にラルクは顔良に問いかける。

ラルク

「なあ、顔良さん。確かアンタ達の仕掛けたシールドの範囲内ってどれくらいの距離があるんだ？」

顔良

「ええっと…モンスター達の行動範囲も想定して計算してますから、大体この病院の周囲約10キロぐらいかと…」

ラルク

「じゃあギリギリBSAA学園もシールド範囲内に入ってるはずだな。袁紹社長、アンタ次第だよ。BSAA学園から一気に人手を集めて、万全の態勢で挑むか？もしくはこれだけの人数でモンスター狩りにとりかかるか？どっちにする？」

袁紹

「もちろん決まってますわ！」

袁紹はきつぱりと宣言した。

袁紹

「人手が多いことには越したことはありませんわ！猪々子！斗詩！大至急そのBSAA学園という学校の方にも参加者の募集を掛けなさい！」

そして、すぐさま袁紹はBSAA学園にモンスターハントメンバー募集の呼びかけを送ったのであった…

## 総合病院でトラブル発生！？マジで！？（後書き）

### 次回の予告

零斗

「何い！？政胸達が原因でモンスターが脱走したのかあ！？こりや大変だなあおい！」

フランケン

「零斗、理事長からの集まりがあるらしいよ」

零斗

「次回！『理事長からのお話？』どうやらハントの募集のようです」

フランケン

「ハントの募集って？」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2506ba/>

---

春休みだよっ！BSAA学園！モンスターハントで大騒動！？

2012年1月6日14時47分発行